

感有かんあり（山崎闇齋やまざきあんさい）（源みなもとの）頼政よりまさ）

短歌 庭にわの面おもはまだかわかぬに夕立ゆうだちの

空そらさりげなく澄すめる月つきかな

坐そぞろに 憶おもう 天公てんこうの 世塵せじんを 洗あろうを

雨あめ 過すぎて 四望しぼう 更さらに 清新せいしん

光風こうふう 霽月せいげつ 今いま 猶なお 在あり

唯ただ 缺かく 胸中きょうちゆう 洒落しゃらくの 人ひと

坐憶天公洗世塵 雨過四望更清新  
光風霽月今猶在 唯缺胸中洒落人

解説 たまたま大雨があり、雨後の清々しい明月を仰いで感ずるところがあつて作つた詩。

語釈 ※坐憶 何となく考える。「坐」はそぞろと読む。※天公 俗にいう、おてんとうさま。※四望 四方。あるいはあたりを眺める。※光風霽月 さわやかな風、雨後の清らかな月。※洒落 さっぱりしていて物事にこだわらぬこと。

通釈 何とはなしにお天道さまが、人間の世の塵をすっかり洗い清めてくださったかと思われるぐらい、一雨過ぎたあと、あたりの眺めというものは、なんと清らかで気持ちのよいことであらうか。かつて黄庭堅が、周濂溪を称して「光風霽月の如し」といったが、まさにそのとおり。さて光風霽月は今、なお見られるが、今の世にはそれに比べられるような胸中のさっぱりした人物が欠けている。まことに残念なことである。